論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏名（本籍）	周　敏莉（中国）
学位の種類	博士（中国研究）
報告番号	乙第 34 号
学位授与年月日	2024（令和6）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
論文題目	汉语方言从构式到程度词的语义演变研究
審査委員	主査　塩山　正純
	副査　黄　英哲
	副査　薛　鳴

2024（令和6）年　月　日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本論文は、中国語の方言における程度表現（本論文では英語“degree word”に基づいて“程度語”）の成立に関して、それぞれの語固有の意味が様々な要因によって文法化していくプロセスをフィールドワークと一次資料調査により収集された豊富な用例に基づき実証的に解明したものである。論文の主要な考察は、連用修飾語として機能する程度副詞、程度補語、それから程度を表す接辞に関する三つの章から構成されており、概要は以下の通りである。

第一部に相当する第二章では、六つの方言における程度構文から主観程度副詞への変化を検討し、以下の結論を導き出し、六つの方言における程度副詞の来源となる構文には、程度疑問詞“几、多、好”や、これらの程度疑問詞から派生した程度副詞が含まれることを指摘している。

（1）湖南南部方言について、主観程度副詞“晓了”と“晓得”が高程度を表す“晓不得+好+X”に由来し、“了”はもとの構造の省略形“晓得+好+X”の“得+好”の合音で、“晓得”は省略形から“好”が脱落し形成されたものであること、中国語の方言で直接脱落型、合音型の二種類の“省缩（エリジョン）”が発生する。

（2）陝西省南部方言では、“管（X）”類の程度副詞“管多”と“管几”は高程度を表す“NP+管+几/多+VP”の動詞“管”（“別管”義）と疑問代詞“几/多”の連用固定化によるもので、“管”の形義不一致が文法化プロセスの要因であり、程度副詞“管”は“管多”のエリジョンからの派生で、“管几多”の形成は方言間の接触と融合が関する可能性がある。

（3）余干方言（江西）では、“NP+話得+几(样)+AP/VP”の短縮形から派生し、“话得几样→话得几/话几样→话几”のプロセスで形成された“话几”が性質形容詞、二音節の状態形容詞、心理動詞、状態義を有する非心理動詞フレーズを修飾し、量的差異を有する対象に程度の値を付与することで、程度の高さが核心的語義であることを示し、“话几+AP/VP”が述語、補語或いは目的語の中心語の修飾語となる。元の構文が示す高程度において“话得”が話者の強い肯定感を持つことから、“话几”も強い感嘆の語気を帯びる。

（4）光山方言では、程度副詞“该几”が程度感嘆構文“该+几+VP”の連用固化で生成されたもので、比較的強い主観性を有し、“该几+VP”構造が主節、連用・連体修飾の従属節の述語や補語の位置で制限を受ける。“该”には認知情態義の弱化と語気機能の強化が見られる。“该”が程度副詞の内部構成要素へと発展する文法化の新しい道筋を明らかにし、語彙形成のプロセスにおける構文の重要な役割も示している。

（5）新県方言では、程度感嘆構文“莫+要+几+VP”に由来する程度副詞“嘛几”が高度な主観性を持ち、非明示的コンテクストに対する強い敏感性に寄与している。“嘛几”は否定文、疑問文、命令・願望文、未来形、従属条件文等において等しく制限される。“莫”と“要”の合音が“嘛”となり、認知的様態義の弱体化と語気機能が強化される過程を経て、“几”との連用で語彙化された。程度構文“莫+要+几+VP”は、普通話の“不要+太+VP”と、程度義の来源が異なり、前者は推測、後者は忠告の意味に関連する点も指摘する。

（6）新県方言については、構文“还没几+XP+（的）”が、主に述語や補語として機能し、話者がXPの性状が高程度であると見なしていることを示し、XPは主として量的差の意味を持つ述語成分である。同構文は強い感嘆義を示し、その程度義の獲得はエコーラリアのコンテクストと密接な関係があり、汎エコーラリア的発展プロセスを経ている。さらに、“还没+V（得）+几+A+的”のような変体も存在し、“的”が削除されることで“还没几”が程度副詞へと文法化する傾向（削除による文法化）を有することとなる。

第二部にあたる第3章は四つの部分からなる。述語に程度補語を加えて形成されるフレーズである“述程式”の構造に着目し、四種類の程度補語が程度義を獲得するプロセスに関する考察であり、

以下の四点にまとめることができる。

（1）程度補語“完”は主に東北、胶遼、中原、蘭銀、西南等の官話方言と呉語、徽語、平話等に見られ、方言間でその統語的コロケーション能力が異なる。含意的な完全数量化の用法が統語的制約を受けることを析出し、補語“完”の典型的な数量化用法の判定基準を提案し、地域別に意味進化のプロセスがあることを指摘している。“完”が典型的な数量化用法を有する広西域内の西南官話では、程度補語“完”が、完結義の動詞が完全数量化によって発展したもので、換喩（メトニミー）機能の産物であると論じる。一方、他方言では、完結義の動詞から直接発展した結果である。原義が同一であっても、方言間で異なる進化のプロセスをとる可能性があることを実証し、語義変化に関する研究にエリア類型論の視点を導入する必要がある。

（2）新興の“述程式”構文“X +得+一逼/一比/一批/一匹”は、消極義の単音節形容詞Xの程度が極めて高いことを示すが、来源は江淮官話の“述程式”構文“X+得+一戾屌糟”で、その短縮形“X+得+一戾”の変形である。江淮官話の“一戾屌糟”とその短縮形の形成はメトニミーとアナロジー、経済原則による省略、インターネット上の書面コミュニケーション環境等の要因による変化の結果である。本論文は以上の考察から、程度表現と罵語の間の意味的な関連を実証している。

（3）“X成啥了”構文は、主体が述語成分の形容詞Xが表す性状・情態が極めて高い程度に達していることを表す。述語成分Xは主に測定可能な意味を持つ性質形容詞、心理動詞、状態動詞、そして情態発生を表す動作動詞である。この構文は語用論的推論によって程度意味の獲得が誘発され、構文の形成は中国語の程度表現体系の制約とポライトネス原則から影響を受ける。

（4）近年、インターネット上で流行している新興の構文“X到没朋友”は、性質Xが極めて高い程度に達していると話者が認識していることを表す。Xは主として性質形容詞であるが、一部の動詞や名詞の場合もある。同構文の程度義が鮮明になる要因は主に主体の生命度と形質Xの主観的評価義であり、主体の生命度が低いほど、或いは形質Xの主観的評価がポジティブであるほど、構文の程度義がより明確に強調される。この構文が実義フレーズから類推・一般化のプロセスを経て最上級の程度構文に発展したことは、隠喩の認知メカニズムと“陌生化（未視化）”の修辞が重要な要因となっている。また、その程度義は、広東語の“X到冇人有/陪”と類似の来源を有している。

第三部としての第4章では、構文から最高級の程度副詞への変化と、構文から接辞への変化の、二種類の語義変化の事例について考察し、以下の諸点を明らかにしている。

西南官話吉永片の“NP+一个儿+VP/AP+不定量詞”では、数量フレーズ“一个儿”がNPをコンテクスト上の複数の対象と明確に対比することで、NPの独自性と他者との区別性を鮮明にし、間接的に最上級“NP最VP/AP”を表現する。吉首方言の程度副詞“个儿”は数詞“一”と不定量詞が省略・脱落して形成される。西南官話の常澧片、怀靖片の一部の方言でも、“一个人”“(一)条人”“独”等が不定量詞とともに構成する同様の表現がある。

本論文は、換喩（メトニミー）の認知メカニズムと構造の省略・短縮等の要因が文法化の重要な機能を担うことを指摘しており、方言の程度表現における数量から程度への語義変化のパターンとその要因の再検討に資するところがある。

また、本論文は、換喩（メトニミー）のメカニズムのもとで、“（程度語＋）形容詞＋家伙”が単独で文を形成して感嘆を表し、構文全体の機能を“指称”（言及）から“陈述”（陳述）へと変化させ、“家伙”が名詞から接辞へと変化し、形容詞（フレーズ）が表す性質と状態を強調するという名詞の文法化の新たなプロセスも明らかにしている。その要因として、構造全体の統語的位置と談話文脈、連体修飾語マーカーの存在、“家伙”の語義自体の一般性、類推のメカニズムを挙げる。

上記内容に基づき、周敏莉氏の論文には以下に挙げる新たな着眼点が認められる。

先ず、（1）従前の先行研究の不足を補うかたちで、中国語の方言における程度表現（程度語）の起源と形成過程に着目し、個別事例の通時・共時的研究の精度を強め、中国語方言の程度語の意味進化の一端を示した。次に、（2）中国語方言の程度義の様々な構文の来源に基づき、方言の程度表

現（程度語）を分類し、変化のプロセスとパターンを抽出することで、方言の程度表現（程度語）について、意味上の起源や具体的な発展変化のプロセスにはそれぞれ異なるところがあるが、いくつかのパターンと共通点が存在することを示した。そして、（３）本論文は、構文から程度語への中国語方言の意味進化パターンの共通性と個別性を方言横断的に検討することで、方言における程度表現（程度語）の変化は、メトニミーやメタファーといった普遍的な認知処理メカニズムに関連するだけではなく、削除による文法化といった中国語の構造的特徴にも制約されることを指摘した。

［口頭試問］

口頭試問は2024年1月24日10時00分から質疑応答を含めて12時10分までオンラインで行われ、周敏莉氏本人は中国からオンラインで、審査委員として主査の塩山、副査の黄、薛の3名が会場で参加した。試問終了後、続いて12時30分まで審査委員による非公開の審査会議を行った。試問の冒頭に、まず本人による同論文の内容説明（ＰＰＴ使用）を行ったのちに質疑応答を行った。質疑応答の中では、審査委員からは以下の各項の指摘と評価が示された。

・先行研究を網羅的に収集、概括した上で、豊富な一次資料を駆使し、方言において程度表現（程度語）が形成されていくプロセスを通時的かつ実証的に考察し、明示したことは大いに評価できる。

・複数の方言における副詞・補語としての程度表現について、先行研究を踏まえ、豊富な資料とフィールドワークで得られた用例を詳細に分析し、各表現の成立に至るプロセスとして、語の本来の意味の希薄化、発音の融合や語の省略などによる定型化（文法化）の過程を見事に説明している。

・同時に複数の方言を考察する研究は、筆者の広い視野による類型論的試みの表れである。

・41～45頁で扱う“管几”と共通語で無条件を表す“不管…多X”形との関連性の有無については、主語の前に現れる“管”との使い分けが認められることから、別のものである可能性を指摘し、また、75頁で扱う情態助動詞で意味的には乖離している“该”と“敢”で、後者が前者の異体字（本論文では“記音字”と表記）であることの可能性については、さらに方言の母語話者に対する更なる調査の必要性を認識していること等、個別課題に対する認識が明解である。

・たいへん意欲的な研究であり、今後さらに東北方言等の方言も考察対象とする意思も示されていることから研究の更なる広がりが期待できるが、複数の方言を扱うだけに、そこから見えてくる共通性と個別性を類型論的に系統立ててまとめていくことも期待したい。

・研究に対する熱意が感じられる労作であり、博士の学位に値する力作である。

・取り上げた方言の選択基準と根拠についてもう少し丁寧な説明が必要である。

・方言の調査には、文献資料、フィールドワークから収集するデータ以外に、さらにデータベースに蓄積された“語料”（言語データ）を積極的に活用すべきである。

以上、口頭試問での周氏による論旨説明と質疑応答によって、論文本体の概要だけではなく、論文構想のプロセスから、本論文を通過点とする今後の新たな具体的課題に至るまで、周氏の研究活動における本論文の位置付けが明らかになった。

周敏莉氏の論文には今後さらにデータベース等の豊富な用例の活用も視野に入れた詳細な分析を必要とする箇所が複数あることは否めないものの、当該テーマの領域における先行研究によって明らかにされているところと今尚不足している部分とを明確に検証し、独自の客観的な視点と基準を提案した上でのデータ分析によって、一定の水準を保ったうえでの個別事例についての分析を重ねて客観的な結論を導いていると見做すことができる。よって、審査委員会において検討の結果、十分評価に値する研究成果であることを全員一致で確認した。周敏莉氏はすでに研究者としてのキャリアを着実に歩んでいる研究者であるが、本論文を一つの里程標として、この先も当該テーマについて、常に通時、共時の両面と階層差を視野に入れ、より広く、深く探求を続けることを期待したい。以上の理由から、審査委員会は本論文を博士学位論文として十分な資格があるものと認める。

以　上